

元豊四年（一〇八一年）頃の黄州での作

食猪肉

ちよにく
猪肉を食らう

雑言古詩

黄州好猪肉

黄州猪肉好し

價賤等糞土

あたい ふんど ひと
価銭は糞土に等し

富者不肯喫

ふうしゃ あえ
富者は肯へて喫らわず

貧者不解煮

ひんじゃ かい
貧者は煮るを解せず

慢著火

ゆるや
慢かに火を著け

少著水

すこ
少しく水を著け

火候足時他自美

かこう それ おのず うま
火候足れる時他自から美し

每日起来打一碗

お いちわん つく
毎日起き来たりて一碗を打る

飽得自家君莫管

じか あ きみかん
自家を飽かし得れば君管すること莫かれ

【通釈】黄州の豚肉は上質で、値段は土のように安いというのに、金持ちには食いたがらないし、貧乏人は調理法を知らない。ゆっくり火をつけ、水は少なめ。十分グツグツに 煮れば、自然にうまくなる。毎日起きたら一碗作る。自分で腹いっぱいになればそれでいい。他人の知ったことではない。

「価銭、他、（人以外のもの）、打（料理などを作る）、自家（自分）」など。口語語彙を多用した。戯れ歌である。古来、花鳥風月を描いた詠物詩は数多いが、このように豚肉を、しかも自分でそれを料理するやり方を描いたというのは珍しい。グルメの東坡先生ならではの作である。中華料理で、「東坡肉トンポーロ」という豚肉の角煮があるが、それはこの詩に基づいて名づけられたといわれている。

蘇東坡一〇〇選 石川忠久より抄出